

「文学」から「歴史」への越境 —ラ・ゲット夫人『回想録』の出版をめぐる—

嶋 中 博 章

要 旨

本稿は、虚構に満ちた『回想録』という「文学ジャンル」を、歴史の「史料」として読む可能性を探ったものである。ここで取り上げるラ・ゲット夫人の『回想録』では、彼女の生きた17世紀に流行したバロック文学の特徴を示す「変身」と「見せびらかし」という要素が溢れ、そこで語られる出来事も歴史的事実としては認め難い内容であることが確認された。こうした虚構性の高い作品に歴史への回路を見出すため、本稿では『回想録』が執筆され刊行されるまでの経緯に着目し、改めて記述内容に検討を加えた。その結果、この『回想録』が、過去の事実を語るよりも、全盛期にあるフランス絶対王政に批判を加えることを目的とした政治パンフレットとして機能している可能性を見出した。本稿で筆者が意識したのは、「エクリチュール（書く行為/書かれたもの）」を「アクション（行為/影響）」として捉える視点である。こうした視点によって、「虚構/事実」の対立を乗り越えることが可能になると考えたからである。これまで没交渉のまま仕事をする事の多かった歴史学と文学研究（文学史）が協働できる場を構築すること、これが本稿の大きな目的でもある。

キーワード：ラ・ゲット夫人、回想録、バロック文学、変身と見せびらかし、露呈の真実

1. ラ・ゲット夫人の回想録とその問題点

ラ・ゲット夫人ことカトリーヌ・ムルドゥラ Catherine Meurdrac¹⁾ (1613-?) は、結婚が家族間の契約とみなされ、親の意向に、なかんずく父親の意向に従うのが当たり前とされていた17世紀にあって²⁾、自らの意志を貫き、父親の反対を押し切って恋愛結婚を成就させた稀有な女性として知られる³⁾。彼女の、夫（ジャン・マリオないしマリウス、通称ラ・ゲット Jean Mariot ou Marius, dit La Gnette）に対する愛情は、死が二人を分かたずまで消えることがなく、夫が亡くなった晩などは、「愛しい夫」cher mariの遺体を持ち出して、寝台に隠そうとしているところを司祭に見つかり、叱られるほどだった⁴⁾。そんな彼女だったから、愛する夫と長男ルイが、1651年、コンデ親王の反乱に呼応したマルサン伯 comte de Marsin ou Marchin に従って、反乱派の拠点ボルドーに向かったとき、相当思い悩んだに違いない。夫と息子が家を離れたからではない。不在ならば、軍人を夫とした以上、妻として耐えることには慣れていた。そうではなく、彼女にはどうしても譲ることのできない信念があったのである。その信念は、彼女の記した回想録の中にはっきりと表明されている。

その少し後、皆さんもご存知の通り、フランスにひとつの党派〔コンデ派〕ができました。マルサン殿は〔遠征先の〕カタルーニャと王への奉仕を捨てて、ギユイエンヌにいる親王殿下の軍隊に合流しました。私の夫は、不幸なことに、彼に付き従った者のひとりでした。もう一度不幸だったと言います。なぜなら、たとえどんなことが起ころうとも、またいかなる口実が可能であっても、王への奉仕を離れては絶対にならないからです⁵⁾。

ラ・ゲット夫人にとって、王への忠誠は絶対であった。それなのに、本来仕えるべき主人である王に夫が仕えず、それどころか王に逆らう「党派」に加わったことに、彼女は胸を痛めたのだ。彼女の国王に対するこの忠誠心は、後に彼女にひとつの決断を下させるに到る。

1652年の秋、反乱軍に与したロレーヌ公の軍1万8,000が、7,000に満たないテュレンヌ麾下のフランス軍に襲いかかろうとしていた。このフランス軍の危機を目の当たりにしたラ・ゲット夫人の心に、次のような祈りの言葉が浮んだ。

偉大なる神様！ 乙女ジャンヌはシャルル7世を救いました。主よ、今度は私がルイ14世のお役に立てるようにして下さい⁶⁾。

この瞬間から、ラ・ゲット夫人は危難に見舞われた国王を救うため、自らの意志で歴史の荒波に飛び込んでいく。王国に平和を回復し、王を苦難から救い出すため、内乱のフランスを文字通り駆け抜けていくのである。

その後ラ・ゲット夫人が繰り広げる冒険物語は、結婚をめぐるエピソード同様、男性支配が女性を受動的境遇に押さえつけていたとされる時代に、女性であっても主体的に生きることができたことを示す数少ない、それゆえに貴重な証言として読むことができる。例えば、近世史の大御所ピエール・グベールとダニエル・ロッシュが著した『アンシアン・レジームとフランス人』の中の囲み記事では、彼女の生涯が次のように紹介されている。「ラ・ゲット夫人は女性が置かれていた状況の複雑さを垣間見させてくれる。当時は〔男女の〕さまざまな役割が混ざり合い、夫や子供への愛が可能であることが明らかになり、女性が政治を行ったり、幻想ではなしにフロンドの只中で党派を選らんだりできたのである⁷⁾」。

ところが事はそれほど単純ではない。確かにラ・ゲット夫人の回想録を読めば、彼女が「夫や子供への愛」に満ちていたこと、女性であっても政治的活動に身を投じられたこと、そしてそれゆえに波乱に満ちた生涯を歩まねばならなかったことがわかる。しかし、彼女が語ることが「幻想」でないと、そう簡単に言い切れないのである。実際、彼女の回想録は、ひとりの女性が生きた過去の現実の証言として受け止めるには、あまりに問題を含みすぎている。

実を言えば、ラ・ゲット夫人の存在は、19世紀の半ばまで忘却の淵に沈んでいた。彼女の回想録は、1681年に刊行されていたものの、同時代人が残した回想録の類に彼女への言及は

なく、「偉大な世紀」に関する該博な知識をもつあのヴォルテールでさえ、彼女については一切口をつぐんでいる。つまり、彼女の書いた回想録以外に彼女の存在を証明する史料が見つかっておらず、その回想録も第三者による創作の可能性があったのである。その結果、19世紀フランスの最も有名な史料編纂事業であるモンメルケとプティットの回想録選集（1820-1829年）からも、ミショーとプジュラの選集（1836-1839年）からも、ラ・ゲット夫人の回想録は洩れてしまった。

こうした状況に変化が現れたのは、1856年にセレストン・モローがラ・ゲット夫人の回想録の再刊を決意してからのことである。モローは教区簿冊の他、さまざまな古文書を探し出し、ラ・ゲット夫人およびその家族について調べ上げ、「確証をもって、ラ・ゲット夫人が実在した」ことを証明したのだった⁸⁾。その後彼女の回想録は、1929年にピエール・ヴィギエの校訂版が、さらに1982年にはミシュリーヌ・キュエナンの校訂版が出され、現代の私たちにも手軽に楽しむことのできる書物となった⁹⁾。

とはいえ、作者の実在がどれほど詳しく確証されようとも、作品がどれほど身近なものになろうとも、記述内容が過去の事実を伝えているか否かは別の問題である。ラ・ゲット夫人の回想録に関するモノグラフを著したフェリックス・レイモンド・フロイドマンは、「ラ・ゲット夫人は実在の人物であり、回想録の中の供述のいくつかは本当である」ことは認めながらも、「このことが果たして、この作品の信憑性に関する全面的な肯定的結論を許すだろうか」と語り、慎重な姿勢をとっている¹⁰⁾。

ここでフロイドマンが表明した疑念は、何もラ・ゲット夫人の回想録についてのみ当てはまるわけではない。彼女以外の回想録もまた同じ問題をはらんでいるし、回想録以外の史料にだって同じことが言える。ただ、ラ・ゲット夫人の回想録が深刻なのは、その「供述」のいくつかが完全な作り話である可能性が高いこと、フロイドマンの言葉を借りれば「歴史史料というより歴史小説の外観をもっている¹¹⁾」ことである。もちろん、そのことをもってラ・ゲット夫人の回想録に史料としての価値がないと判断すべきでないことは言を俟たない。私たちに求められているのは、そうした「信憑性」に欠ける史料であっても、「小説」に近いような史料であっても、それを避けるのではなく、むしろその中に歴史の痕跡を見出すべく努力することであろう。歴史家が古文書館史料を特権化し、文学作品はいわゆる文学史家や文学研究者に委ねていればよい、という時代ではもうない¹²⁾。歴史家は古文書に固執することなく、文学史家あるいは文学研究者から虚心坦懐に学ぶべきことがたくさんある。

本稿ではラ・ゲット夫人の回想録を素材に、旧来であれば文学史家ないし文学研究者に委ねられてきたであろう作品をいかにして「史料」として扱うか、その道筋の一例を考えてみたい。そのためにまずはラ・ゲット夫人の回想録のどこが「歴史小説」と言えるのか、文学研究の成果を援用しつつ筆者なりの理解を示す。その上で、その「歴史小説」としての回想録が「史料」となり得る局面を、「文学」から「歴史」の領野に移行するその瞬間を捉えてみたい。そ

れではラ・ゲット夫人が「乙女ジャンヌ」になることを決意した、1652年の出来事に立ち返ることから始めよう。

2. フロンドの乱とラ・ゲット夫人

ラ・ゲット夫人がフランス王の軍隊の危機を知ったのは、これを攻撃しようとしていたロレーヌ軍のある少佐の口からだった¹³⁾。なぜこの将校が大事な作戦上の秘密を漏らしたのか、彼女の回想録に理由は記されていない。いずれにせよ、彼女が胸の内にフランス王への堅い忠誠心をもっていることを、この将校は知らなかった。そして彼が漏らしたその情報が、ラ・ゲット夫人にジャンヌ・ダルクになることを決意させたのだった。

将校に案内されてロレーヌ軍の幕舎までやってきたラ・ゲット夫人は、石灰窯の上から、整然と行進するロレーヌ軍を視察した。そしてその眺めから、将校の言葉がはったりではないことを知る。そこで彼女は、なんとか攻撃を中止させてフランス軍を救おうと一計を案じた。すなわち、すでにフランス軍は大砲を据えて近くの森に大規模な伏兵を置いていること、さらに武装した1万の農民が待ち構えてすらいることを、言葉巧みにその将校に信じ込ませ、ロレーヌ公に攻撃を思いとどまるよう説得させようとしたのである。彼女の機転の効果は絶大だった。

彼〔ロレーヌ軍の少佐〕は私を石灰窯の上に残し、大慌てで離れていきました。彼は駐屯地にいたロレーヌ兵の馬に跨ると、全速力で後衛部隊にいるロレーヌ公殿を見つけにいき、私が話したことを伝えました。公爵殿は彼の話をつっかり信じ込みました。私はそのことを30分後に知り、心から神を讃えました¹⁴⁾。

ラ・ゲット夫人の活躍はこれで終わらなかった。このロレーヌ軍撤退によって態勢を立て直したフランス王権は、程なくしてパリの反乱を平定し、首都入城を果たす(1652年10月21日)。その平和を回復したパリで、ラ・ゲット夫人は市の助役でフィリップという名の人物に会い、自分が「王への奉仕のためにしたこと¹⁵⁾」を話した。するとこの人物は母后アンヌ・ドートリッシュに事の次第を話し、さらに次のような進言をした。

母后陛下、もし陛下が時宜を得ているとお考えならば、この同じ人物〔ラ・ゲット夫人〕はボルドーの問題で役に立つかもしれません。彼女はマルサン伯ととても親しく、彼も彼女を信頼しております。彼女の夫もその一味ですし、国王と母后陛下のために何でもすることでしょう¹⁶⁾。

パリのフロンド終結後、ボルドーはフロンド派最後の砦として王権に反旗を翻しつづけてい

た。パリのフロンドを維持できずフランドルに亡命したコンデ親王に代わって、彼の弟コンティ親王が反乱派の旗頭におさまっていた。そしてマルサン伯およびラ・ゲット氏もまたボルドーに踏みとどまって、反乱をつづけていたのである。

パリ市助役フィリップが母后と会談したその3日後、ラ・ゲット夫人は母后の前にいた。そして母后直々にボルドー行きの密命を受けた。

母后は、私が本当のフランス人として、忠実な臣民として振舞った、私が王のために果たした奉仕は報われるだろう、とおっしゃいました。ただ、4日後にはボルドーへ旅をしなくてはならない、そのことについて話がしたい、とも申されました。陛下が私のなすべきことをわざわざ話して下さったので、私は深々とお辞儀をし、「陛下、最善をつくします」と申し上げました¹⁷⁾。

ラ・ゲット夫人が具体的にどのような指示を与えられたのか、この記述からはわからない。ただ、この後の記述内容から判断して、マルサン伯を通じてコンティ親王に降伏を促すことが目的だったらしい。こうして始まるボルドーへの旅は、彼女の回想録の山場のひとつでもあるのだが、それについてはいずれ語る機会もあるだろうから、ここではこの旅の結果だけ確認しておこう。

夫のラ・ゲット氏にはペリグーで会うことができた。妻がなぜはるばる危険な旅を敢行したのか訝る夫に、彼女は「そのことについては問い詰めないで頂戴。時が来ればわかります。でも何も心配なさないで¹⁸⁾」といなし、母后から密命を受けていることを明かさなかった。マルサン伯に会ったのはその数日後、ボルドーでのことだった。ここで初めて彼女は旅の本当の目的を明かした。

夜、皆が引き下がると、彼〔マルサン伯〕と私だけが残りました。……彼は私の旅に何か秘密があることをちゃんとわかっていました。私も彼にすべてを打ち明け、心に浮ぶ確固たる理由に基づいて事に当たりました。彼はたいそう機嫌が良いように見えました。そして彼は、このことをコンティ親王殿下にお話し、国王が満足されるよう力の限りやってみる……とおっしゃいました¹⁹⁾。

実際、マルサン伯の言葉は空約束ではなかった。

マルサン伯殿はコンティ親王殿下と協議なさり、私に話すべきことは話されたので、私はフィリップ殿に手紙を書き、母后にお会いし次のことを請け合せて欲しいと伝えました。すなわち、2日後、夫を伴って出発し、私が行ったことを報告しに参上するということ、

そして私の旅は無駄ではなかったと予め約束できるだろうということです²⁰⁾。

ここで一度、話を整理しておこう。1652年、ラ・ゲット夫人はテュレンヌ旗下の国王軍が、数の上で圧倒的優位に立つロレーヌ公の軍隊の攻撃を受けそうになっていることを知る。乙女ジャンヌのようにフランス王への忠誠心に溢れる彼女は、一計を案じ、言葉巧みにロレーヌ公に攻撃を思いとどまらせ、王がパリに入ることを助ける。この働きはやがて母後の耳に入り、今度は母后から直接、反乱を続けるボルドーを降伏させるため使命が与えられる。そして期待通りに任務を遂げた、という次第である。

見事という他ない。フロンド派の二大拠点、パリとボルドーの反乱を終結に導いたのだから。彼女こそ、フロンド平定における最大の功労者と呼んで過言ではないだろう。

しかし、である。今日、フロンドの乱を扱った歴史研究で、ラ・ゲット夫人の功績を評価するものは管見の限りひとつとしてない。彼女の名前すら出てこないのが普通である。それには理由がないわけではない。先にも触れたF. R. フロイドマンは、ロレーヌ軍撤退に関して次のように述べる。「実際のところ、彼女の物語の正確さを疑わざるを得ない深刻な理由がある。……公的、私的、数多くの同時代史料がこの出来事を伝えるが、ラ・ゲット夫人がそこに関与したという仮説を確証するものはひとつもない。遠くまで政治的影響を及ぼすこうした介入が、秘密のままにされることなどあり得ないだろう²¹⁾」。同様に、ボルドーでの役割についても、否定的・懐疑的な態度をとっている。「カトリーヌ〔ラ・ゲット夫人〕によれば、マルサン伯は（真偽は別として、話によれば、彼女の影響を受けて）降伏するようコンティを説得し、それと同時に親王を説き伏せて自身のために王の許しを話し合ってもらった。しかし……もう一度言うが、彼女の説明を裏づけるものは何もない²²⁾」。

後世のこうした批判を予測したかのように、ラ・ゲット夫人は自分の活躍が世に知られていない理由を自ら説明している。彼女によると、ボルドーから帰ったラ・ゲット夫妻は母后と宰相マザランに相次いで拝謁し、妻はその働きを称賛された。ところが夫の方は、宰相から翌朝もう一度会いに来るよう命じられたものの、実際に伺候すれば、宮廷が近々フォンテーヌブローに移動することのみ告げられ、同行すべきか尋ねると、それには及ばないと言われる。それから1週間程して宰相がパリに戻って来たので再び訪ねれば、宰相は「すべてが王の望み通り満足のいく形で片付いたので、もう為すべきことは何もない」とそっけなく答えただけだった²³⁾。

宰相の冷淡な態度にすっかり落胆したラ・ゲット氏は、宰相に向かって、未だボルドーに残っているマルサン伯のもとに戻ると告げた。宰相はそんなことをすれば逮捕されると、脅しもとれる忠告をしたが、ラ・ゲット氏は言葉を撤回しなかった。ラ・ゲット氏の頑なな態度を前に、

枢機卿陛下は「それならお前のしたいようにするがよい」と申されました。夫は恭しくお辞儀をして退出しました。同日、夫は馱馬車に乗ってボルドーに向かい、そこからマルサ

ン伯と一緒にフランドルに行きました。こうした理由から、私はもう敢えて宮廷に姿を現さなくなり、私が為したあらゆる奉仕は埋もれたままになったのです。でもこれで私が自分に最高の満足を感じなくなったわけではありません。なぜなら、多くの人々が自らの過ちに気づき、義務に立ち返ったのは、私のおかげだったのですから²⁴⁾。

つまり、ラ・ゲット夫人の活躍が闇に埋もれたままになったのは、夫が宰相の対応に失望し、忠告に耳も貸さず、フランドルへ——そこではコンデ親王がスペイン軍の司令官としてフランス軍を相手に戦っていた——向かったためだったと言うのである。原因は、冷淡な宰相ないし軽率な夫にあると言いたげである。もちろん、ラ・ゲット夫人の弁明を鵜呑みにできないことは言うまでもない。回想録がしばしば過去の現実を捻じ曲げ、作者の弁解や自己顕彰の場として利用されていることを、私たちはすでに知っている²⁵⁾。結局、ラ・ゲット夫人の回想録も、この弁明だけでは彼女を主人公にした冒険物語の域から抜け出せない。その点、フロイドマンが彼女の回想録を「歴史史料というより歴史小説の外観をもっている」と評したのも納得ができるのである。

3. バロック文学としての回想録

実際、ラ・ゲット夫人の回想録は、恋あり、冒険あり、涙あり、笑いあり、一篇の小説としても楽しむことができる。単なる思い出の寄せ集めではなく、読み物としての、あるいはこう言って良ければ「文学作品」としての魅力も備えているのである。

ラ・ゲット夫人の回想録を文学作品として眺めた場合、彼女の青・壮年期に流行した文学潮流、いわゆる「バロック」文学との親近性が注目される。もともと建築や絵画、彫刻の様式を表わす概念だった「バロック」が、文学の領野に適用されるようになったのは、フランスの場合、第二次世界大戦後のことだった。16世紀のルネサンスと17世紀後半の古典主義の空隙を埋める概念として注目を集めたのだ²⁶⁾。バロック文学の特徴としては、装飾性、怪奇性、流動性、あるいは筋の複雑さや荒唐無稽さなど、さまざまな要素が指摘されているが²⁷⁾、ここではスイスの文学研究者ジャン・ルーセが提示した「キルケと孔雀」、すなわち「変身と見せびらかし」*la métamorphose et l'ostentation* という要素に注目したい²⁸⁾。

17世紀（とくにその最初の3分の2）、文学作品は、変身・変装・仮装と、そこから生れるまやかしや変動といった主題に溢れていた。その状況は、宮廷バレエ、牧歌劇、悲喜劇、小説、どれをとっても変わりがない。ルーセ曰く、「変化してゆく人物、あるいは自分を実際とは違ったものに見せかける仮装の状態にある人物。これこそいつもバロック演劇の獲物になる²⁹⁾」のだと。そしてより大切なのは、「変装とまやかしという根底的な主題と、この時代を風靡する感受性との間には、いわば共犯関係がある³⁰⁾」という点である。歴史家イヴ＝マリー＝ベルセ

もまた、フロンド期にコンデ親王夫妻が従僕と田舎の貴婦人に身をやつして旅をしたエピソードを取り上げ、現実世界と小説世界の相互浸食を指摘していた³¹⁾。以上の点を踏まえた上で、ラ・ゲット夫人の回想録に戻り、まずはこの「変身」という主題について見ていくことにしよう。

ラ・ゲット夫人がボルドーでの使命を終え、宮廷に参上したとき、母后アンヌ・ドートリッシュは彼女に次のような質問をしたという。

陛下はまた私に、男の格好をして en habit d'homme 旅をしたのか、ともお尋ねになりました³²⁾。

ここに登場する異性装 transvestisme は、バロック文学で好んで取り上げられる変装手段である。異性の格好をする目的はさまざまだが³³⁾、女装をする男性、そして男装をする女性は、バロック文学ではお馴染みの登場人物であった。また、変装と当時の人々の感受性との「共犯関係」という点で言えば、この時代、異性装が文学の枠を越えて現実世界にまで浸透していたことを私たちは知っている。例えば、近世の祝祭（とくに謝肉祭）やこれとしばしば結びつく民衆反乱では、女装した男たちの姿が数多く見られたし、男に成りすまし軍隊で兵士として生きた女たちが少なからず存在したこともわかっている³⁴⁾。したがって、ラ・ゲット夫人の回想録は、異性装の伝統というバロック時代の文学的かつ社会的な背景の中に組み込まれていると言えよう。

さて、ラ・ゲット夫人は母後の先の質問に何と答えたであろうか。彼女の返答はこうだ。

陛下、私は今光栄にも陛下の御前に罷り越しました格好で旅をいたしました³⁵⁾。

実は彼女は男装をきっぱりと否定しているのだ。でも、がっかりすることはない。確かに彼女が男装をすることはなかったかもしれないが、彼女の旅は異性装の伝統の中で繰り返されている。

1653年、ラ・ゲット夫人はボルドーに向かう途中、サン＝トバン Saint-Aubin なるコンデ派貴族の歓待を受けた。彼はラ・ゲット夫人が宮廷側についていることを全く知らなかった。さらにもうひとつ、彼は大きな勘違いをしていた。

後で気がついたのですが、彼は私が女装をした大貴族 un très-grand seigneur déguisé en femme で、親王殿下の党派に合流しに行くところだと、思い違いをしていたのです³⁶⁾。

この取り違えは、ラ・ゲット夫人の気分を害することはなかったようだ。むしろ彼女自身、この間違いを面白がっていたようで、こんな悪戯を仕掛けている。

サン＝トバン殿が退出しようとしたとき、私は彼の耳元で一言ささやきました。娘をひとり寄こして、私の部屋で寝かせて欲しいと頼んだのです。これで彼は私が男だとすっかり思い込み、もはや疑いませんでした³⁷⁾。

ラ・ゲット夫人を女装した男性と勘違いしたのは、何もサン＝トバンひとりではなかった。彼女は行く先々で女装した男性と間違えられてしまう。ボルドーからの帰途出会った宮廷派の貴族サン＝プレイユ Saint-Preuil なる人物は、「私を女装したマルサン伯だと思い込み」、仲間のリベラック伯 comte de Ribérac に、この変装したフロンド派の要人を捕まえて、宮廷に知らせるよう要請した³⁸⁾。

リベラック伯の領地には、ラ・ゲット夫人が到着する以前に、女装したマルサン伯がやって来るとの情報が広がっていた。領主と同じく宮廷派である宿屋の主人は、「私に対していつもこれ以上ないくらいに横柄な口の利き方をしました。というのも、彼は心の底から私をマルサン伯だと信じきっていたのです³⁹⁾」。こうした勘違いが広まっていることを、ラ・ゲット夫人ははじめ気づけなかった。それを教えてくれたのは、夫の軽い冗談だった。

そうこうしている間に夫が入ってきて、誰もいないことを確認してから、私の手を取りこう言いました。「ではマルサン殿、リベラック伯殿に会いに参りましょう。——マルサン伯ですって？——はい、マルサン殿。皆、あなたが彼だと言っているからね⁴⁰⁾」。

ラ・ゲット夫人は変装することなく変装した。女装した男性に見える女性。読者を眩惑するこの二重の変装、これがラ・ゲット夫人の回想録のバロック的なまやかしの仕組みである。「わたしは事実わたしでないものに見えるのです」——ジャン・ルーセが「この世紀の銘」として例示したバロック演劇の中のこの台詞は、ラ・ゲット夫人にこそ相応しい⁴¹⁾。

視点を少しだけ変えてみよう。ラ・ゲット夫人は男装をしなかったにもかかわらず、男性と間違えられた。不在の変装によって彼女は「わたしでないもの」、すなわち男性に変身する。つまり、彼女の意思とは無関係に行われた二重の変身によって、彼女の男性性が強調され、彼女に内在化されるのである。もし彼女が実際に男装したために男性と間違えられたのであれば、彼女の男性性は表面的なものにとどまり、衣装の下はやっぱり女性ということになっていただろう。しかし、彼女は男装をしていない。彼女の男性性は彼女自身に由来する。事実、彼女の肉体には男性の刻印が押されていた。先程読んだ、彼女がボルドーからの帰りに立ち寄った宿屋での出来事である。そこで彼女はひとりの女中に靴をきれいにしよう頼んだ。

彼女〔女中〕が下の階に下りていくと、皆は〔靴の〕中に足を入れ、間違いなく私が男だと言いました⁴²⁾。

ラ・ゲット夫人がこうした取り違えを不快に思わず、楽しんですらいるように見えるのは、彼女自身が自らの男性性に気づいていたからに他ならない。彼女は自分が若い頃から男性的な性質と肉体を持っていたことを正直に告白している。

……私の気質はいつも好戦的 *martiale* だったので、私は父に剣術の先生をとってくださるよう頼み、父も同意してくれました。告白しますが、フルーレ〔練習用の剣〕を持っているとき以上に充実していることはありませんでした。先生と一緒にこの技術を磨いているうちに、私の手首は頑丈になりました⁴³⁾。

フェミニズム史学の旗手ジョン・W・スコットは、E.P. トムソンの『イングランド労働者階級の形成』に登場する女性たちに触れて、一般的な女性には見られない行動力を発揮する「例外的な女性には、たいていは男によっておこなわれるタイプの政治的行動をおこなう力があるということを示している」にすぎないと語り、女性の活躍に関する叙述に潜む陥穽を鋭く指摘した⁴⁴⁾。ラ・ゲット夫人の回想録もまた、「男によっておこなわれるタイプ」の活躍が記述されていることに間違いはない。しかし、ラ・ゲット夫人の場合、主人公の行動の男性的表象は読者を欺く陥穽として隠されることはなく、むしろこれ見よがしに表出される。実を言えば、ラ・ゲット夫人の男性性は、回想録の物語が始まる前からすでに示されている。すなわち、回想録本文の前に置かれたパラテキスト、「書肆から読者への言葉」*Avis du libraire au lecteur* の次の文言である。

……私は彼女を女性と呼びます。彼女が彼女の性 *son sexe* と正反対の気質を持っているとしても⁴⁵⁾。

こうして私たちは、ルーセが提示したバロック文学のふたつめの特質「孔雀＝見せびらかし」の問題に足を踏み入れていることに気づく。ルーセはコルネイユの劇作品に登場する人物のバロック的性格に触れて次のように語る。「コルネイユ的主人公は見せびらかしの人物である。それは、バロックの建築家が構造と装飾を切り離し、後者に優位を与えるように、実在と外観を切り離してバロック建築の建築正面のように構成されているのである⁴⁶⁾」。まさしくラ・ゲット夫人の回想録は、女性としての実在から男性という外観が切り離され、後者がラ・ゲット夫人なる人物の建築正面として構成されているような印象を与える。

近世の女性の手になる出版物を扱った論考の序文で、エリザベス・C・ゴールドスミスはラ・ゲット夫人の回想録に触れてこう述べている。「……彼女の本の中に読者が見つけようと期待する女性の声は、しかしながら、彼女の語りの中には見出すことができない⁴⁷⁾」と。ゴールドスミスのこの指摘は、それゆえ、スコットが主張するようなフェミニズム的解釈とのみ手を結

ぶのではなく、「変身と見せびらかし」を特徴とするバロック文学の伝統との関連においても理解されねばならないだろう。

4. 「文学」から「歴史」へ

以上私たちは「変身と見せびらかし」という観点から、ラ・ゲット夫人の回想録の中に、バロック文学との親近性を見出した。ただしこのことは、ラ・ゲット夫人の回想録が専ら「文学作品」としてのみ鑑賞されるべきだということを意味しない。かつてロラン・バルトが示唆したように、あらゆる「文学作品」はその「生産、伝達、消費」の次元において（のみ）「歴史」的な考察が可能になる⁴⁸⁾。近年、「文学事象の歴史」Histoire du Littéraireが提唱され、「文学」が社会的・政治的現実の問題として捉えられ、そのエクリチュール（書かれたモノ/書く行為）とそのアクション（行為/影響）の関係が議論されているのも、「文学作品」に刻み込まれた「歴史」の重要性が認識されてきたからに他ならない⁴⁹⁾。

ここではラ・ゲット夫人が回想録を執筆・刊行したという「生産」の側面から、文学から歴史への越境を試みたい。というのも、思い出していただきたいのだが、ラ・ゲット夫人は自分が「為したあらゆる奉仕は埋もれたままに」なっても「最高の満足を感じ」ていると語っていた。にもかかわらず、彼女はその奉仕について回想録の中で語り、かつ活字として公表した。先の言葉と実際の行動とは明らかに矛盾していよう。間違いなくラ・ゲット夫人には自分の活躍を書き記し、活字として世に知らしめる意図をもっていた。ラ・ゲット夫人にはエクリチュールをアクションとして作用させたい何らかの思惑があったのだ。この問題を考えるにあたって、先程私たちが利用した「変身と見せびらかし」という視点が大いに役立つことになる。しかしその前に、少しだけ回り道をして、ラ・ゲット夫人が回想録を執筆・刊行するまでの経緯を押さえておくことにしよう。

夫ラ・ゲット氏は、一旦コンデ派を離れて妻のもとに戻ったが、宰相マザランの対応に失望し、再びコンデ派に合流、その後、コンデ親王のいるスペイン領フランドルへ向かったのであった。その彼が夫人の待つフランスへ戻ってきたのは、ピレネー条約（1659年11月）が締結され、親王らの帰国が公式に認められるより少し前のことだった。異国での生活に飽いたラ・ゲット氏は、フランスにいる友人を通じて王に赦免を願い出たのだった。彼の願いは「コンデ親王殿下および彼の党派の利害と完全に手を切り、王の緊急の言いつけがない限り宮廷に顔を出さず、自邸に行き、上記陛下のご意向を待つ⁵⁰⁾」ことを条件に許可された。しかし、骨の髄まで軍人氣質のラ・ゲット氏にとって、帰国後の蟄居生活は相当こたえたらしい。次第にメランコリーに沈み込んでいった「彼は、何も楽しむことができなくなり、職務も王の命令もないので宮廷に行けないことが二重の苦しみとなって、ついにはその悲嘆のために足の裏から髪の毛まで黄疸が出て、命を奪われて⁵¹⁾」しまった。

一方、ラ・ゲット氏が自邸に籠もり鬱屈した日々を送っていた頃、かつての主人マルサン伯はフランドルにいた。ピレネー条約によって一旦はコンデ親王とともにフランスに帰国が許されたが、翌1660年、今度は正式にフランドルのスペイン軍で軍務に就くことをフランス王に願い出、これが認められたのだった。再びフランドルへ向かうマルサン伯の傍らには、ラ・ゲット夫妻の長男ルイの姿もあった。彼は「マルサン伯の人柄にすっかり魅せられ、彼から離れられなかった⁵²⁾」のだという。

こうしてひとり、またひとりと身近な人間が遠くへ行ってしまった。3人いた娘も、ひとりには乞われて長男夫妻の暮らすフランドルへ発ち、ひとりには修道女となって俗世を離れ、もうひとりはこの世を去った。「それゆえ私は身边から子供がひとりもいなくなり、すっかり暗い気持ちになってしまいました⁵³⁾」。

そんな彼女のもとに嬉しい便りが届いたのは、夫の死から7年程経った1672年のことだった。スペイン軍の待遇に不満を抱き、オランダに移り住んでオラニエ公に仕えていた長男ルイが、「彼の傍で残りの日々を過すよう強く懇願してきた」のである。再び息子や娘と暮らせる。ラ・ゲット夫人は迷わなかった。直ちに旅装を調えたと馬車に飛び乗り、息子夫婦と娘の待つオランダ・ハーグへと向かったのである⁵⁴⁾。彼女が回想録を執筆したのは、このハーグでのことである。到着直後から書き始め、彼女がまだ存命中の1681年に『彼女本人の手になるラ・ゲット夫人の回想録』と題されて、ハーグのフランス語専門出版業者、アドリエン・ムーチェンス Adrien Moetjens の手で刊行された⁵⁵⁾。

ここで確認しておきたいのは、ラ・ゲット夫人が回想録を執筆していたとき、彼女はフランスを離れオランダで暮らしていたこと、そしてその回想録は彼女の存命中にオランダで刊行されたこと、この2点である。それを踏まえた上で、本節のはじめに提示したエクリチュールとアクションの問題、回想録の「生産」にまつわる「歴史」の問題に戻ろう。

ラ・ゲット夫人の回想録を「歴史史料というより歴史小説」と評したF.R.フロイドマンは、回想録執筆・刊行の意図について次のような仮説を立てている。少々長いが、彼の見解が明確に述べられている箇所なので、引用しておく。

「ルイ14世の絶対王政は、回想録が出版された1681年には完成の域にあった。国王の恩恵が最も重要な時代に、この回想録は王の恩恵を回復しようという試みを体現しているのではないか。……仮にラ・ゲット夫人がフランスに戻りたいと願ったとすれば、彼女は最初に王の好意を確保せねばならなかった。思うに、彼女はこの願いを抱いていたのだろう。……フランスに戻る道を固めるため、フランス王権が彼女に負い目を感じさせる行いについて述べた印象深い報告を提示することが有効だったのではないか、否、必要だったのではないだろうか⁵⁶⁾」。

確かに、ラ・ゲット夫人のフランス王と祖国に対する愛着から考えて、フロイドマンの仮説は十分説得力を持つように思われる。「たとえどんなことが起ころうとも、またいかなる口実が可能であっても、王への奉仕を離れては絶対にならない」と彼女は述べていなかっただろう

か。しかし、彼女がオランダへ発ったのは、国王の勸気を蒙ったからではない。夫は不興を買ったが、彼女の働きは認められていたはずである。もともと彼女には「王の恩恵を回復する」必要などなかったのである。さらに彼女の回想録を注意して読むと、フロイドマンの仮説には結びがあることに気づく。例えば、ルイ 14 世のオランダ侵攻、いわゆるオランダ戦争に関する記述である。

ラ・ゲット夫人がハーグに到着する直前、フランスはオランダに宣戦した（1672年4月）。そこでラ・ゲット夫人はハーグに着くと早速、義娘とフランス海軍の様子を見に行った。望遠鏡を覗くと、白や青の吹流しをなびかせたたくさんの軍艦が見える。そして、

敵の船団 *La flotte ennemie* は 3, 4 日そこに停泊した後、テッセルの方に向けて進み、そこでオランダの船団に出会いました⁵⁷⁾。

なんとラ・ゲット夫人は祖国の船団を指して「敵」と呼んでいる。あれほどフランス王への忠誠を力説していた彼女の言動からは考えにくい言葉ではないだろうか。もしかすると、彼女の個人的不幸が、フランス軍を敵と見なす理由を彼女に与えたのかもしれない。というのも、1673年6月、ルイ 14 世がマーストリヒトを攻囲した際、ラ・ゲット夫人の長男ルイがフランス軍の砲撃を受けて重傷を負い、それが原因で命を落としたのである⁵⁸⁾。息子の命を奪ったフランスは、もはや保護を求める相手ではない。息子が身命を擲って尽くしたオラニエ公の統治するオランダこそ、彼女がその恩恵にすがろうとした相手なのである。回想録の末尾に記された次の一文は、ラ・ゲット夫人の愛着の移動をはっきりと示している。

私は……つねに神の聖なる御心に従うことに決めました。そうして最後の日を待ち、私の家族に対するオラニエ公殿下の恩恵が続くことを期待します⁵⁹⁾。

したがって、「フランスに戻りたいと願った」ラ・ゲット夫人が、ルイ 14 世の「好意を確保」しようとして回想録を執筆・刊行したとするフロイドマンの仮説は少々無理があるように思う。近世フランスの女性史を研究するキャロリン・チャペル・ルージーも、フロイドマン説のこうした弱点に気づいたひとりである。彼女は逆に、ラ・ゲット夫人が回想録を出版したのは、オランダという新天地で生きるためだったと考える。「自分の人生の物語を公にすることは、オラニエ公ウィレムおよび、もっと広くハーグにいる各国から集まったエリートたちとの間に、彼女が必要とする新しい保護の関係を作り出す、ないしは強化するための手段だった⁶⁰⁾」というわけである。

しかし私はここで、フロイドマンとルージーの見解の相違を強調し、どちらか一方の解釈を支持するよう訴えたいわけではない。むしろ彼らの意見が一致する部分に着目したい。先に引

用した箇所の少し後で、ルージーは次のように述べる。「王〔ルイ 14 世〕に対する立場は、〔オラニエ公のときと〕同じ方向を向いていない。……ルイ 14 世に向かって主張したこと、それは政治的関係についての伝統的理解である。すなわち、個々人の義務は個人的な忠誠心から生じ、王権はその臣民と相互的な義務を負うというものである⁶¹⁾」。

フロイドマンとルージー、ふたりの見解はラ・ゲット夫人が帰国を願っているか否かで対立したが、彼女がかつての忠勤振りをルイ 14 世に思い出させようとしているという点では同じ考えである。17 世紀のフランスの社会は、愛情に基づく主従の相互的な献身と報酬の関係によって秩序が生み出されていたと考えられている。つまり、家臣は愛情を寄せる主人に対し力の限り奉仕し、その見返りに主人はその家臣にできる限りの報酬や保護を与える、これが理想だった。この主従間の相互的な絆を、今日のフランス史研究では、「フィデリテ」*fidélité* と呼ぶ。とくに貴族などの政治的・社会的エリート層では、このフィデリテが行動を律する一種の規範として機能していたと考えられる⁶²⁾。したがって、フランスに帰りたかったか否かは別として、本来君臣関係にあるべき相互的な奉仕と報酬の関係（＝フィデリテ）をルイ 14 世が蔑ろにしていると、ラ・ゲット夫人が非難していると思えることもできるだろう。

こうして私たちは、バロック文学の懐へと再び戻ることが可能になった。かつて乙女ジャンヌの再来としてルイ 14 世とフランスのために尽くすことを誓ったラ・ゲット夫人が、今はフランスを「敵」と呼び、ルイ 14 世の宿敵オラニエ公に公然と保護を求めている。読者はあたかもキルケの魔法にかけられたかのように、この突然の「変身」に一瞬目を眩まされる。さらにこの急激な変化が引き起こす動揺は、ラ・ゲット夫人ないし彼女の息子のオラニエ公に対するこれ見よがしの賛辞、彼に寄せる信頼感の「見せびらかし」によって、いよいよ強められる。ラ・ゲット夫人によれば、彼女の息子がフランス軍の砲弾を受けたとの知らせが届いたとき、オラニエ公は直ちに腹心ふたりを派遣し、

……状況が状況なので会いには行けないが、家族の面倒はみるので、その点に関しては一切心配する必要がない、と申されました。私の息子は……自分はしがない従者であったが、これほど偉大な君主が彼に関するあらゆることに言葉をかけて下さったのだから、満足して死んでゆける、と伝えて欲しいと頼みました⁶³⁾。

この「偉大な君主」に対する称賛の気持ちは、死の間際まで息子から消えなかったことを母親は繰り返す。

殿下は彼のことを評価し、宮廷の皆から尊敬されてもいましたので、私の息子は満足していましたし、喜んで仕えてもいました。……ですから彼は、マーストリヒトの攻囲戦で不幸かつ致命的な砲撃を腿に受けて命を落とす最後の一息まで、愛情と名誉をもって仕えた

のです⁶⁴⁾。

息子ルイのオラニエ公に対する愛情と息子に寄せるオラニエ公の厚情、この相互的な信頼に満ちた主従関係（フィデリテ）の「見せびらかし」によって、ラ・ゲット夫人の「変身」は正当性を確保される。彼女がフランスで得ようと思っても得られなかった理想的な主従関係がここにはある。オラニエ公の有難い言葉（「家族の面倒はみる云々」）は、フロンドの乱で尽くした彼女に対するフランス王権の冷たさを際立たせるだろう。彼女がフランス王への忠勤を見せびらかしていただけない、一層この対比は鮮明になる。

さらにラ・ゲット夫人の回想録が出版された時期、フランスではプロテスタントに対する寛容政策が捨てられ、威圧的な姿勢をとり始めていたことも無視できない。有名な竜騎兵による迫害（いわゆるドラゴナード）が本格化するのも1680年前後のことであり、多くのプロテスタント信者が祖国を捨て、オランダに移住し始めていた（ナント勅令が廃止されるのは、回想録出版から4年後の1685年のことである⁶⁵⁾）。ハーグには早くから亡命プロテスタントが集まり、1668年の段階ですでに800家族がいたと言われる⁶⁶⁾。フランスを追われてオランダにやって来た人々に、ラ・ゲット夫人の物語はフランスの非情を思い起こさせると同時に、オランダで暮らす希望を与えたに違いない。オラニエ公ないしオランダ側から見れば、ラ・ゲット夫人の回想録は、宿敵ルイ14世のフランスの偏狭さを批判すると同時にオランダの懐の深さを印象づけることに貢献することになっただろう。実際、1680年代からオランダは、フランスに残るプロテスタントへの援助活動やフランス政府への圧力行動の拠点になっていた⁶⁷⁾。

ラ・ゲット夫人の物語が事実であるとか作り話であるとかが問題なのではない。なぜなら、彼女のエクリチュールは事実ありのままを語るというより、彼女の変身を見せびらかし、同時代人の行動規範に訴えることで、権力の絶頂にあるルイ14世に冷や水を浴びせるというアクションにこそ意味があったのだから。「外観を擁護し、苦悩や憎悪ないし愛を誇示することを弁護し、真の、あるいは偽りの感情をこのように見せびらかす⁶⁸⁾」のが、バロック的人間だとルーセは言う。だとすれば、行動の面でもラ・ゲット夫人は間違いなくバロック的人間である。バロック文学の登場人物は、物語世界を抜け出し、現実世界でも冒険を繰り返す。バロック文学の特徴は、それに親しんだバロック時代の人々の行為をも特徴づけずにはおかないのである。

おわりに

回想録の刊行後、ラ・ゲット夫人はどうなっただろう。オラニエ公から期待通りの庇護を受けられただろうか。現在、その答えを知る者はいない。回想録だけが、今のところ私たちに残された彼女に関する最後の痕跡である。

その回想録に私たちはバロック文学の色濃い反映を見出した。もともと信憑性に欠ける記述

内容——テュレンヌ救助およびボルドーへの密使——は、異性装をめぐる滑稽な逸話や主人公の特異な一面（男性的表象）の誇示によって、一層「文学」的色彩を帯びるようになった。「キルケと孔雀」、「変身と見せびらかし」という、J. ルーセが提示したバロック文学の約束が律儀なほどきちんと守られているのである。

しかしそのバロック文学の特質は、物語世界を抜け出して、じわじわと現実世界への侵食を始める。物語の後段、「変身」のテーマは保護を求める君主の変更という形をとり、急速に現実的＝政治的な姿をとり始める。さらにこの現実的＝政治的「変身」は、新しい君主に寄せる称賛の気持ちないし信頼感の「見せびらかし」によって、その裏返しとして、旧主君に対する不満の表明としての役割を担うことにもなる。つまり、ラ・ゲット夫人の回想録では、事の真偽は別として、ラ・ゲット夫人の献身を蔑ろにするフランス王権の不実さが、オラニエ公の寛大さ・誠実さと対比される形で、告発される。バロック文学として読むことのできるラ・ゲット夫人の回想録も、現実世界で作用する側面をもっていたのであり、この点に、この回想録を歴史の証言として読む可能性を開く鍵がある。

ただし、ここで言う「歴史」あるいはそれに付随する「歴史の真実」とは、たんに過去の「事実」を指すのではない。歴史家＝批評家ツヴェタン・トドロフは、歴史の真実をふたつに分けて捉える必要を訴える。ひとつは「適合の真実」la vérité-adéquation、すなわち、全てか無かの二者択一を迫られる「真実」。例えば、アウシュヴィッツでのユダヤ人虐殺はあったかなかったか、という問題がこれに当たる。もうひとつは「露呈の真実」la vérité-dévoilement、すなわち、より多い真実かより少ない真実かが問われる場合がそれで、トドロフは例としてナチズムの大義名分などを挙げる。そして、歴史家は細部の事実（適合の真実）で事足りりとするのではなく、批判に身を晒すことになったとしても、その向こうにある時代の本性（露呈の真実）に近づくべく努力をしなくてはならないと、トドロフは説く⁶⁹⁾。ラ・ゲット夫人の場合、適合の真実には欠けるけれども、露呈の真実がその欠落を埋める。つまり、フロンドの乱をめぐる諸事実に関しては、歴史の真実を示さない。しかし、ことがフロンド時代の貴族の歴史的世界と文学的世界に対する認識及び態度に関するならば、真実を語っている。

その意味で、ラ・ゲット夫人が自らをジャンヌ・ダルクになぞらえたのは示唆的である。それはC. C. ルージーが註の中でさりげなく触れているように、ジャンヌが王の忘恩を告発するのうってつけの人物であることもあるが、それに加えて、彼女が歴史（家）と文学（者）の双方に靈感を与えつづけてきた存在であるためでもある⁷⁰⁾。ラ・ゲット夫人が乙女ジャンヌであるのは、フランス王に尽くし見捨てられた存在としてであると同時に、「歴史」と「文学」の境界を自由に往き来する存在としてである。こうしてラ・ゲット夫人の回想録は、私たちに「文学」と「歴史」の境界が堅牢な壁によって隔てられているのではないことを教える。彼女らバロック文学の同時代人にとってこの境界の往来は自由だ。壁を作るのは、私たち現代の読者でしかない。

注

- 1) 本来なら《Meurdrac》は「ムルドゥラック」と読みたいところだが、19世紀半ばにラ・ゲット夫人の『回想録』を校訂したセレストン・モローによれば、彼女の生れた教区の記録に《Meurdras》という綴り字が見出されるので、当時の慣例では最後の《c》は発音しなかった可能性があるという。本稿ではこのモローの指摘に従い、「ムルドゥラ」と表記することにした。*Mémoires de Madame de La Guette*, nouvelle édition, revue, annotée et précédée d'une Notice par Célestin Moreau, Paris, 1856, Préface, pp. xii-xiii. 以下本稿では、ラ・ゲット夫人の回想録からの引用は、このモロー校訂版を利用する。
- 2) この点に関しては、多くの論者が何度も繰り返して指摘してきた。さしあたっては以下の文献を参照。前野みち子『恋愛結婚の成立』名古屋大学出版会、2006年、69-70頁。フランソワ・ルブラン（藤田苑子訳）『アンシアン・レジーム期の結婚生活』慶應義塾大学出版会、2001年、25-38頁。Roger Duchêne, *Etre femme au temps de Louis XIV*, Paris, 2004, pp. 127-136. もちろんすべての結婚が家族の意向通り遂行されたわけではなく、貴族の中には家族の意向を無視し、恋愛感情や金銭目的で結婚する者たちも少なからずいた。しかしその場合、家族はその結婚が「誘拐」であると主張して無効を申し立てることもできた。結婚と誘拐については、滝澤聡子「15世紀から17世紀におけるフランス貴族の結婚戦略—誘拐婚—」『人文論究』（関西学院大）第55号第1号、2005年、293-309頁を参照。
- 3) Jean-Marie Constant, *La Noblesse française aux XVI^e-XVII^e siècles*, Paris, 1994, pp. 123-126.
- 4) *Mémoires de Madame de La Guette*, p. 193.
- 5) *Ibid.*, pp. 89-90.
- 6) *Ibid.*, p. 98.
- 7) 《Catherine de La Guette ou une femme à cheval au XVII^e siècle》, dans Pierre Goubert et Daniel Roche, *Les Français et l'Ancien Régime*, tome 2: culture et société, Paris, 1984, pp. 143-146, citation, p. 144. ラ・ゲット夫人の生涯に関しては、20世紀の初頭すでに、回想録の記述に基づいた紹介がなされている。Anselme Changeur, 《Une cavalière de l'Ile-de-France au XVII^e siècle. Madame de La Guette》, *La Revue* (ancienne 'Revue des Revues'), vol. 90, 1911, pp. 582-596. また、19世紀半ばには、彼女の生涯を題材にかなり自由な創作を加えたフィクションも書かれている。Paul de Musset, 《Mme de La Guette》, *Revue des deux mondes*, tome 26, 1841, pp. 272-305.
- 8) *Mémoires de Madame de La Guette*, Préface, p. ix.
- 9) *Mémoires de Madame de La Guette*, éd. par Pierre Vigié, collection 《Jadis et Naguère》, Paris, 1929; *Mémoires de Madame de La Guette 1613-1676 écrits par elle-même*, édition établie, présentée et annotée par Micheline Cuénin, Mercure de France, 1982.
- 10) Felix Raymond Freudmann, *The Memoirs of Madame de La Guette. A Study*, Paris/Genève, 1957, p. 14.
- 11) *Ibid.*, p. 86.
- 12) 例えば二宮宏之は、「同じく歴史の研究者でありながら、思想家の著作や文学作品、絵画や建造物などの芸術作品に立脚することの多い思想史・文学史・美術史などの研究者……などが、本来の歴史家とは別種の存在とみなされがち」なのは、「歴史研究がもっぱら文書館、つまりは文書史料と結びつくかたちでしか考えられてこなかった重い遺産」のためだと指摘し、「近代の学問のタコソボ型の専門化が批判され、相互の乗り入れが常態になろうとしているときに、歴史家はそれに背を向けていれはすむであろうか」と問いかける。二宮宏之「歴史の作法」上村忠男・二宮宏之他編『歴史を問う 4 歴史はいかに書かれるか』岩波書店、2004年、6-8頁。
- 13) *Mémoires de Madame de La Guette*, pp. 97-98.
- 14) *Ibid.*, p. 100.
- 15) *Ibid.*, p. 113.
- 16) *Ibid.*, p. 114.
- 17) *Ibid.*, pp. 114-115.
- 18) *Ibid.*, p. 137.
- 19) *Ibid.*, pp. 140-141.

- 20) *Ibid.*, p. 146.
- 21) Freudmann, *op. cit.*, pp. 40-41.
- 22) *Ibid.*, p. 86.
- 23) *Mémoires de Madame de La Guette*, pp. 170-174, citation, pp. 173-174.
- 24) *Ibid.*, p.174.
- 25) 拙稿「近世フランス貴族のフィデリテ-コリニー伯の回想録から-」『西洋史学』第125号, 2004年, 54-67頁。同「史料としての回想録-レ枢機卿の叙述をめぐって-」『奈良史学』第24号, 2007年, 7-31頁。
- 26) *Le dictionnaire du littéraire*, sous la direction de Paul Aron, Denis Saint-Jacques et Alain Viala, Paris, 2002, p. 47.
- 27) わが国におけるバロック文学研究については, 以下の文献を参照。小場瀬卓三『バロックと古典主義』白水社, 1978年。倉田信子『フランス・バロックの小説世界』平凡社, 1994年。
- 28) Jean Rousset, *La littérature de l'âge baroque en France. Circé et le paon*, Paris, 1954 [ジャン・ルーセ (伊東廣太・齋藤磯雄・齋藤正直他訳) 『フランス バロック期の文学』筑摩書房, 1970年]。なお, ルーセによれば, 文学史上の「バロック」とは, おおよそ1580年から1670年を指す。*Ibid.*, p. 8 (邦訳4頁)。
- 29) *Ibid.*, p. 248 (邦訳374頁)。
- 30) *Ibid.*, p. 52 (邦訳68頁)。
- 31) Yves-Marie Bercé, 《Les princes de Condé héros de roman: La princesse amazone et le prince déguisé》, dans *La Fronde en questions*, Colloque préparé, textes recueillis et publiés par Roger Duchêne et Pierre Ronzeaud, Aix-en-Provence, 1989, pp. 131-141.
- 32) *Mémoires de Madame de La Guette*, p.170.
- 33) 倉田信子によると, バロック小説に見られる変装の理由は, ①敵を欺いて身の安全を図る, ②女装して意中の女性に近づく, ③身分の高い英雄が正体を隠して武者修行をするためである。倉田, 前掲書, 316頁。
- 34) 民衆世界における異性装とその意味については, ナタリー・ゼーモン・デーヴィス (成瀬駒男・宮下志朗・高橋由美子訳) 『愚者の王国 異端の都市』平凡社, 1987年所収の論文「支配する女」(165-199頁)を参照。女性兵士に関しては, ルドルフ・M・デッカー, ロッテ・C・ファン・ドゥ・ボル (大木昌昌訳) 『兵士になった女性たち-近世ヨーロッパにおける異性装の伝統』法政大学出版局, 2007年。
- 35) *Mémoires de Madame de La Guette*, p. 170.
- 36) *Ibid.*, p. 125.
- 37) *Ibid.*, p. 126.
- 38) *Ibid.*, p. 160.
- 39) *Ibid.*, p. 162.
- 40) *Ibid.*, p. 163.
- 41) Rousset, *op. cit.*, p. 66 (邦訳91頁)。
- 42) *Mémoires de Madame de La Guette*, p. 161.
- 43) *Ibid.*, p. 8.
- 44) ジョーン・W・スコット (荻野美穂訳) 『『イングランド労働者階級の形成』のなかの女たち』『増補新版 ジェンダーと歴史学』平凡社, 2004年, 151-196頁 (引用は172-173頁)。
- 45) *Mémoires de Madame de La Guette*, p. 3.
- 46) Rousset, *op. cit.*, p. 217 (邦訳331頁)。
- 47) Elizabeth C. Goldsmith, *Publishing Women's Life Stories in France 1647-1720*, Aldershot & Burlington, 2001, p. 2.
- 48) Roland Barthes, 《Histoire ou Littérature?》, dans *Sur Racine*, Paris, 1963, pp. 155-156. (渡辺守章訳 『ラシーヌ論』みすず書房, 2006年, 246頁。)
- 49) 「文学事象の歴史」は, 古典主義文学の研究者アラン・ヴィアラ Alain Viala と近世史家クリスティアン・ジュオー Christian Jouhaud によって提唱された。彼らは現在, 文学研究と歴史学の垣根を越

えた研究グループ GRIHL (Groupe de Recherches Interdisciplinaires sur l'Histoire du Littéraire) を立ち上げ、諸々の「文学事象」に関する歴史的研究を行っている。「エクリチュールとアクション」の問題は、その GRIHL での目下の研究主題である。GRIHL については、拙稿「歴史学と文学研究の対話—GRIHL の活動—」『日仏歴史学会会報』第 22 号、2007 年、13-16 頁で簡単な紹介を行っている。

また日本においても、近世フランス文学研究者、野呂康氏が GRIHL の活動に参加し、「エクリチュールとアクション」という観点から「文学事象の歴史」を逸早く積極的かつ意識的に行っている。野呂康「テキスト、その行為と作用 1655 年、リアンクール公をめぐる出来事について」『佛文論叢』(東京都立大学) 第 17 号、2005 年、21-44 頁。同「テキストの生産と戦略—帰属戦争、テキストの翻訳、文芸の制度化—」『AZUR』(成城大学) 第 7 号、2006 年、63-81 頁。

- 50) *Mémoires de Madame de La Guette*, p. 184.
- 51) *Ibid.*, p. 192. なお、C. モローの調査によって、ラ・ゲット氏の遺体が埋葬されたのは 1665 年 6 月 22 日であることがわかっている。*Ibid.*, Préface, p. xvii.
- 52) *Ibid.*, pp. 191-192, citation, p. 192.
- 53) *Ibid.*, p. 206.
- 54) *Ibid.*, pp. 210-212, citation, p. 211.
- 55) *Ibid.*, Préface, p. xliv. ラ・ゲット夫人の回想録が刊行された 1680 年代からとくに、オランダではフランス語書籍の出版が盛んになる。オランダでフランス語書籍を扱う業者は、フランス人だけでなく、オランダ人やイギリス人など多様であった。ムーチェンスはその中で、フランス語書籍を扱う有力なオランダ人業者のひとりだった。Christan Berkvens-Stevelink, 《L'édition française en Hollande》, dans *Histoire de l'édition française*, tome II, *Le livre triomphant 1660-1830*, sous la direction de Henri-Jean Martin et Roger Chartier, Paris, 1984, p. 319.
- 56) Freudmann, *op. cit.*, p. 92.
- 57) *Mémoires de Madame de La Guette*, p. 213.
- 58) *Ibid.*, pp. 214-216.
- 59) *Ibid.*, p. 218.
- 60) Carolyn Chappell Lougee, 《“Reason for the Public to Admire Her” Why Madame de La Guette Published Her Memoirs》, in *Going Public. Women and Publishing in Early Modern France*, edited by Elizabeth C. Goldsmith and Dena Goodman, Ithaca/London, 1995, p. 26.
- 61) *Ibid.*, p. 28.
- 62) 行動規範としての「フィデリテ」という見解については、拙稿「近世フランス貴族のフィデリテ—コリニー伯の回想録から—」を参照。
- 63) *Mémoires de Madame de La Guette*, p. 215.
- 64) *Ibid.*, p. 214.
- 65) ルイ 14 世によるプロテスタント弾圧については、イヴ＝マリー・バルセ (阿河雄二郎・嶋中博章・滝澤聡子訳) 『真実のルイ 14 世—神話から歴史へ—』昭和堂、2008 年、103-112 頁に簡潔かつ要領を得た評価がある。
- 66) 木崎喜代治『信仰の運命—フランス・プロテスタントの歴史—』岩波書店、1997 年、107-108 頁。
- 67) 前掲書、145 頁。
- 68) Rousset, *op. cit.*, pp. 216-217 (邦訳 330 頁)。
- 69) ツヴェタン・トドロフ (大谷尚文訳) 『歴史のモラル』法政大学出版局、1993 年 (とくに第 I 章「虚構と真実」147-185 頁)。
- 70) Lougee, *op. cit.*, p. 28. なお、これまで一般に 17 世紀はジャンヌ・ダルクへの関心が薄れた時代とされてきた。とくにジャン・シャプラン Jean Chapelain が 6 年がかりで書き上げた叙事詩『乙女、あるいは解放されたフランス』*La Pucelle ou la France délivrée* (1656 年) が、ボワローら同時代の文人たちに酷評されたことで、ジャンヌ人気は低迷することになったとされる (ミシェル・ヴィノック (渡辺和行訳) 「ジャンヌ・ダルク」谷川稔監訳『記憶の場 第 3 巻 模索』岩波書店、2003 年、10-11 頁)。しかし、ロバート・ダーントンが指摘するように、文学史の評価は、必ずしも現実の文学体験とは合致しない。たしかに、ジャンヌ・ダルクはルイ 14 世時代の文人たちの関心を引かなかつたか

もしれないが、同時代の読者の胸の内には依然として乙女は生きていただろう。実際、シャプランの『乙女』は大勢の読者を獲得したらしく、タルマン・デ・レオーは皮肉を込めて『乙女』の人気をこう伝える。「好奇心がこの本を売れさせた。著者の名声が皆にこの本を追い求めさせた。東の間の情熱でしかなかったが」(Talleyrand des Réaux, *Historiettes*, tome 1, texte intégral établi et annoté par Antoine Adam, 《Bibliothèque de la Pléiade》, Paris, 1960, p. 574)。事実、『乙女』の初版はフォリオ版と12折版の二種が刊行され (Réaux, p. 1185, note 6)、初版刊行の翌年には12折版で第3版が出されている (この第3版は、フランス国立図書館 Bibliothèque nationale de France のホーム・ページ上の電子ブック「Gallica」から閲覧可能)。さらに関西大学総合図書館には、初版刊行と同じ1656年に出された出版業者も出版地も記されていない12折版の海賊版が所蔵されている (所蔵番号C*951*C1*1)。グピヨーによれば、シャプランの『乙女』が評価されなかったのは、ジャンヌ・ダルクの不人気というより、叙事詩という文学ジャンルの衰退を意味しているのだという (Ludivine Goupillaud, 《Chapelain recouffé par Perrault : une apologie paradoxale de La Pucelle》, *XVII^e siècle*, n° 215, 2002, pp. 343–365)。

Cross-border from Literature to History : The Publication of the Memoirs of Madame de La Guette

Hiroaki SHIMANAKA

Abstract

The purpose of this article is to find the possibility of reading the Memoirs not only as literary works but also as historical documents. The Memoirs of Madame de La Guette which we read here are full of elements of the baroque literature – “metamorphosis” and “ostentation” – and their content is hard to be received as historical facts. To find the passage to the History in such fictional work, we paid attention to the process of publication of her Memoirs, and reread their content. As a result, we understood that the aim of her Memoirs was less to tell the historical facts or souvenirs of the author than to criticize the absolute monarchy of Louis XIV which was at its zenith. In this article, we tried to perceive the “*écriture* (writing)” as “*action* (act or effect)” and, by this standpoint, to get over the opposition between “truth” and “fiction” or to cultivate the field where History and Literature collaborate.

Keywords : Madame de La Guette, Memoirs, Baroque Literature, Metamorphosis and Ostentation, Vérité-dévoilement